

田村泰次郎「肉体の悪魔」論―中国山西省を訪れて（附：和平劇団手帳資料）

尾 西 康 充

【要旨】

昨年度に引き続き、中国山西省を訪れて田村泰次郎の小説の舞台を取材した。また三重県立図書館の田村泰次郎文庫に収蔵されている「和平劇団手帳」の翻刻を付した。

一

田村泰次郎の「肉体の悪魔」（「世界文化」第一巻八号、一九四六年九月）は、戦後の文壇で一躍脚光を浴びた（「肉体三部作」）のなかでも評価の高い作品で、横光利一や青野季吉からの称賛を浴びた。十九四六年春に三重県四日市に復員した直後から創作がはじめられ、「母の間借り先である、うす暗い六畳の部屋の湿ったタタミの上」や「焼けずにすんだ兄の工場のすすけた片隅」で書き進められたが、泰次郎は「七年近くもペンを持つ生活からひきはなされていた」ために「ほとんど完全な失語症患者」になってしまっていた。戦場で自分がどのような生き方をしたかを家族に理解して欲しいという気持ちで「出口をふさがれた炎のように渦巻いていた」にもかかわらず、「戦場の実相」は、そこで生きた兵士以外の人間には、到底わかってもらえないものではないという「諦めと絶望感」にとらわれていた。

「肉体の悪魔」の背景にあるのは一九四二年夏の晋冀豫省境作戦である。山西省（晋）と河北省（冀）、河南省（豫）の省境附近の山岳地帯に抗日根拠地を形成していた中国共産党軍に対する攻撃を目的としていた。山西省晋城市陵川県から河南省林州市林県にかけて聳える南部太行山脈には、国民党中央軍が華北地方唯一の国民党の拠点として精銳部隊を配備しており、旧日本軍は彼らに攻撃を加えようとするものであった。四月一六日に作戦計画の大綱が示達され、五月二四日から第三六師団および独立混成第三旅団、同第四旅団が作戦行動をはじめた。田村泰次郎が配属された独立混成第四旅団第一三大隊は、六月八日からの第三期作戦から本格的に行動を起こし、山西省長治市平順県の東、河南省林州市との省境附近にいた中国共産党軍の南東に進出して封鎖すると同時に、その周辺一帯を支配していた国民党軍中央軍第四〇軍に対して攻撃を加えようとした。しかし林州市および姚村鎮の国民党中央軍部隊を各個撃破したが、崔底（林県北西約一二キロ）附近の天嶮を利用した複郭陣地による暫編三師の頑強な抵抗に遭遇した。泰次郎は「肉体の悪魔」のなかでそれを「私たち兵隊が後に『地獄谷』と名づけてよんだその南部太行峽付近の苦境」とし「三百メートルもある真直な絶壁で両側を囲まれた谿間で、逆に優勢な敵に包囲せられた」と表現している。河南省西北部にある南北五〇キロメートル、東西四キロメートルの大峽谷は海拔八〇

〇一、七三九メートルのところに高低差一キロをこえる溪谷で、断崖が崛起して群峰がならび、飛瀑が四カ所に見られる。

夜となく昼となく、懸崖より射ち降す砲弾と手榴弾とに曝されて、白味を帯びた肉片とどす黒い血に塗りつぶされた岩と岩との間の死角に蛙のやうに身をへばりつけて、食糧の補給を絶たれた私たちは飢ゑと死の恐怖に打ちひしがれながら、そこで三日間を過ごした。またおびたしい死傷者が出た。敵の攻撃の合間を狙って私たちはそこらの蹟に散らばつてゐる死んだ仲間の屍体をかき集め、岩かげの水気のある石ころの多い砂地を円匙で掘つて、彼等を埋めてゐた。

將軍も、参謀も、もうどうしていいのかわからないかのやうに、呆然とそれを見てゐるだけだつた。さういふ私たちが眼がけて、狙撃弾がびしつと来て、岩に当つて高い音を立てるのだ。

このような絶望的な状況のなかで語り手の「私」は、騒がれる前に俘虜を殺してしまおうと上官に提案する戦友の声を耳にし、「敵眼に曝露してゐる三十米ほどの蹟」を走り抜けて、俘虜たちが息をひそめて隠れているところに向かった。そのとき「私」の眼がとらえた凄惨な戦場の光景は「はるかな懸崖を掠めてさし込んで来る、きらきらした真昼の陽射しが、この飢ゑと、死と、血糊とでこねまされたむごたらしい谿間を照らしていた」という新感覚派の手法で描写されている。「私」は飛瀑に濡れた雑糞から乾パンを一握りつかんで、俘虜たちのいる辺りに放った。彼らは争ってそれを口にしながら、「君」だけは手を伸ばそうとせず仲間を「じつとつめたい眼」で見ているだけだつた。身の危険をかえりみず勇気ある行動であつたにもかかわらず、自分の好意が受け入れら

れなかった「私」は「恥かしさと、憎らしさで、さつと顔の赤らむのを覚えた」。しかしそのとき「君の眼が軽蔑と敵意とで、妖しくかがやいている」のを目撃する。

長い戦場の生活を通して、私が求めてゐるものが、そこにあり、私が何故に君に惹かれてゐたかといふ、そのまぎれのない理由を。その瞬間、私は自分の全身に、それはまるで何か運命のやうな厳粛な衝撃を覚えた。それは戦慄といつてもいい。私はほんやりと立つてゐた。胸がかあつと熱くなつて、眼には涙さへたまつた。

「軽蔑と敵意」によって妖しく輝く眼こそ、「長い戦場の生活」を通して「私」が求めていたものであつた。身体は俘虜として拘束されているが、精神は決して敵に売り渡さない。このような「抵抗する主体」を「君」のなかに見いだし、「運命のやうな厳粛な衝撃」を覚えたという。「肉体の悪魔」はこのときの「衝撃」にもとづいて肉体と精神との葛藤をモチーフにして創作されている。

泰次郎も実際に苦境に立たされた大溪谷での戦闘は、独立歩兵第一三大隊第一中隊の活躍によって活路が開かれた。中隊長の山本好江大尉は第三期作戦の完了後の七月三一日に軍司令官から感状を授けられた。

右ハ中隊長陸軍大尉山本好江指揮ノ下ニ、昭和十七年六月晋冀豫辺区肅正作戦第三期作戦ニ参加シ、河南省林県西北地区ニ於テ、太行山脉ノ標高二〇〇米ニ近キ絶壁上ニ攀登シ、六月十五日払暁、天嶮ヲ特ミ数線ノ既設陣地ニ抛リ頑強ニ抵抗スル敵ヲ勇猛果敢ニ突進セリ。而シテ同十一時三十分徴候ニ依リ中隊長ハ退却中ノ敵部隊

二暫編第三師ノ司令部アリト判断シ独断之ヲ捕捉スルニ決シ炎暑ノ下三日間不眠不休ノ中隊ヨリ特ニ將兵二二名ヲ選抜シテ自ラ之ヲ指揮シ途中抵抗スル約三〇〇ノ敵ヲ撃滅シ十六時更ニ敵約五〇〇ヲ短溝西側懸崖南端ニ圧縮セリ

而シテ十八時頃、中隊長ハ、敵師ノ司令部ガ断崖中腹ノ洞窟ニ潜伏シアルヲ探知スルヤ、周到ノ創意ト果敢ナル奮戦トニ依リ、二十時迄、容易ニ投降ヲ肯ゼザリシ師長劉月亭以下幕僚等十六名ヲ俘虜トシ、敵約二〇〇ヲ捕獲シ、且其ノ他ノ敵約三〇〇ヲ断崖ヨリ墜死セシメ、悉ク之ヲ殲滅セリ

以上ノ行動ハ、中隊長ノ適切ナル機眼ト烈々タル闘志並部下將兵ノ旺盛ナル攻撃精神ヲ以テ積極的ニ任務ニ邁進セル結果ニシテ、其ノ功拔群ナリ（一）

勇猛果敢な第一中隊のおかげで泰次郎たちは死地を脱することができたのだが、石田米子氏がすでに指摘しているように、山本中隊長は一般住民を虐殺した行為によってたびたび中国側の現地資料に登場する人物である（二）。現地資料には、山本隊長が身の毛のよだつような殺害方法によって一般住民を虐殺したことが記録されており、泰次郎も「裸女のいる隊列」（別冊「文藝春秋」四二二号、一九五四年一〇月）などの作品でその一部を描き出している。作戦終了後、軍首脳は「軍の統帥が武断主義に過ぎ、作戦に膚接する治安工作の努力と民心把握の施策に欠けており、また第一線の実情に即さぬ無理な指揮運用がおこなわれた」と総括している（三）。

この第四期作戦は七月上旬に終了し、各部隊は原駐地に帰還することになって、「私」も旅団司令部のある石太治線の陽泉に戻って宣撫班員

の職務を再開する。「君」は晋察冀辺区の演劇運動のグループ「太行劇団第二分団」に所属していた女優であったことが分かり、「福星劇団」という日本軍の宣伝劇団の団員として採用され、「私」と再会するのであった。

二

三重県立図書館に所蔵されている田村泰次郎文庫には、泰次郎が宣撫班員として「和平劇団」を指導していた頃の日記が遺されている。三重県立図書館司書の鈴木昌司氏によって翻刻されており、すでに「田村文庫の日記と書簡」（『丹羽文雄と田村泰次郎』、日本図書センター、二〇〇六年一〇月）に紹介されて、その内容の一部を知ることができる。日記は「肉体の悪魔」の作品設定から約一年前、すなわち南部太行、中条山脈に拠点をおく衛立煌の国民党中央軍（二六個師団、一八万人）に対して攻撃を加えた中原作戦（一九四一年五月七日〜六月一日）直後の六月二三日から付けはじめられている。泰次郎が旅団司令部附の宣撫班員に転属になったのは一九四一年三月ごろと推定されるので、新しい職務をはじめたばかりの時期の日記であったと思われる。日記の冒頭には、昔陽卷峪溝の警備隊によって五月二三日に俘虜にされた「太行山劇団第二分団の団員十名」が泰次郎の許にやって来るといふ記述がある。「女二名」のうちの一人は「王澤民」という名前で、年齢一八歳、本籍山西省和順県西関、高級小学校を卒業して「話劇演員」をしているという。

「肉体の悪魔」の「張澤民」は、作品のなかでは「河北省清豊県出身、年齢二十三歳、百二十九師三百八十五旅衛生部の看護婦」であったと紹介されている。初出雑誌も初収単行本もこのように書かれているが、

現在清豊県は河北省（冀）ではなく河南省（豫）の北東、山東省（魯）に近い冀魯豫三省の交界の濮陽市にある。但し日中戦争の時代は河北省に属していたようである。彼女は清豊県的女子師範に在学していた間、盧溝橋事件が発生し、日本軍が河南省に侵攻したのに憤激して八路军に参加したという。一二九師は河北省邯鄲市渉県に総司令部が設けられており、張澤民が「私」に総司令部の野戦生活を話して聞かせる場面もある。「肉体の悪魔」はタイトルの脇に「張玉芝に贈る」という献辞が付されており、泰次郎も「張玉芝は、実在の女性である。作中のヒロイン張澤民は、張玉芝そのひとではないが、張玉芝の人柄と行動を、かなり事実にしてなぞったものである」と語っている¹⁾。これらを考えれば、張澤民のモデルになった女性の一人が、太行山劇団の「話劇演員」として実在した王澤民であった可能性がある。泰次郎が王澤民に最初に出会った六月二三日の日記には、つぎのような記述がある。

陽泉劇場で、勝川少尉ら一寸芝居させて見る。善木曹長と自分、町へ昼食をたべさせにつれて行く。よく食ふ。麵を四枚食ったのもある。あまり汚いので、はじめて見たときはおどろいた。山から山を毎日猿のやうに歩いてゐたとか。芝居は月二、三回、廊のやうなところや、高台で催すらしい。後は日本軍に迫はれたりして、山嶽地を遊動してゐたらしい。食物もひどかったと。事変以来三年間つづけて来てゐて、総勢三十五名とか、旧劇の大一座なり。

泰次郎は、腹をすかせた俘虜たちが大食するのに驚くと同時に、彼らの服装が「あまりに汚いので、はじめて見たときはおどろいた」という感想を率直に記している。彼らによれば、芝居を月に二、三回上演した

後は日本軍に追われて山岳地を「猿」のように「遊動」する生活を毎日送っていたという。右の三日後に泰次郎は「北京の李香蘭君の家から贈られた支那式」の便箋封筒を彼らに与え、故郷に向けて手紙を書かせている。「彼らの役に立つならば、便箋、封筒も生きたらう。すこしづつ、自分になつて来る」という。また負傷した俘虜に治療を受けられるやうに手配すると、（俘虜たちが）「自分の顔を見て、すこし笑ひかけるやうになつて来た」とし、「うれし。彼らのためには、自分は一兵士ではあるが、出来るだけのことは、してやりたい」と感じている。彼らは八路军の宣伝工作のために移動しながら演劇を上演する、総勢三十五名の「旧劇の大一座」であった。これらの記述を読めば、泰次郎は同じ人間として、俘虜に対する共感を最大限抱いていたことが分かる。

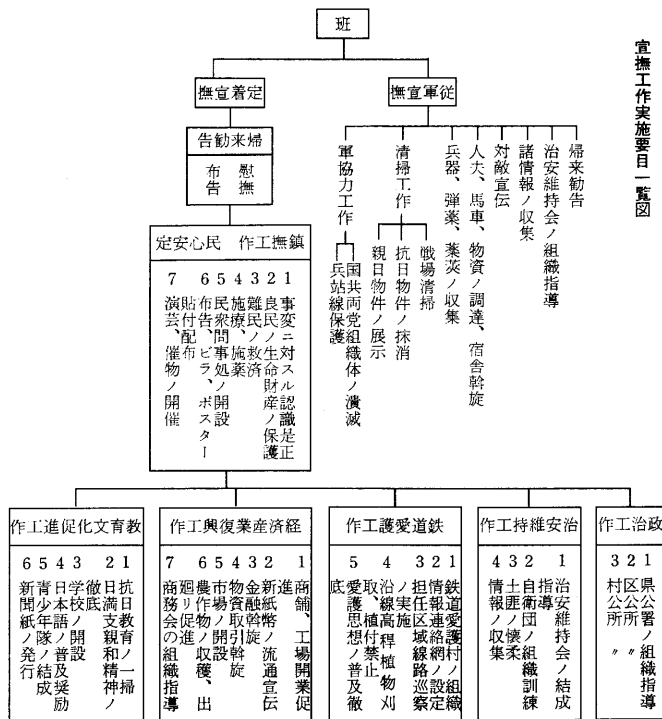
しかしこの後、両者の間には決して埋めることのできない溝のあることを痛感させられる体験があった。当時、反共親日の傀儡政権である華北政務委員会は、王揖唐委員長による指導の下で「保衛華北」をスローガンとして掲げ、盧溝橋事件記念日とされた七月七日から第二次治安強化運動をはじめていた。日本軍の支配に協力する中国人住民を増やすために、泰次郎の劇団も「事変記念日」に「支那劇」を上演し、人心の収攬に努めた。

七月七日

事変記念日。劇団員の食糧、明日一日で全部なくなること。支那楽器を商務会から借りて来て、支那劇をやる。喧しい音楽だけでなく、中国人のこれを好むは想像以上なものあり。沢山の支那人あらはれ、自分は殆ど、片隅に存在を失ひさうであった。はいつていけない、民族のちから、——さういふものを感じて、寂しくなつてゐる

た。打ちのめされた気持。けれど、新しい勇気となること起きう。山西省には、北京の京劇よりも長い歴史を持つ「晋劇」という郷土演劇の伝統があった。泰次郎が劇団員に山西省の伝統演劇を上演させたところ、予想以上に大勢の住民が来観し「自分は殆ど、片隅に存在を失ひさう」になった。そして「はいつていけない、民族のちから、——さういふものを感じて、寂しくなっている。打ちのめされた気持」になってしまふのだが、それにくじけることなく、「振亜」というペンネームで自分が創作した治安強化脚本「郷土英雄」を上演しようとして舞台稽古に

宣撫工作実施要目一覽圖



資料「北支宣撫班」（『独旅』第五号、1973年12月）

はげむ。七月二〇日の初演は「劇場内割れるやうな熱狂のうちに」終わり、翌日も中国人八〇〇名が観賞し、翌々日は独立混成第四旅団の旅团长片山省太郎中将が訪れ、「立錫の余地もない大入満員に、場内はむせて呼吸が苦しい」ほどで「今日はまた全員熱演だ」と記している。この公演で王澤民は、反共話劇「毛三爺」のヒロイン毛夫人役と強化治安話劇「郷土英雄」の主人公陳振華の母役という大役を引き受けている。おそらく女優として舞台の上で人目をひく存在であったのだろう。

ところでこのような宣撫活動に日本軍が力を入れた背景には、一九四〇年の百团大戦で大きな打撃を受けたことがあげられる。陽泉の南西約一〇〇キロにある榆社で治安警備をしていた泰次郎の中隊は、隊長を含めて八割が戦死するという状況で、その補充要員として泰次郎たちが急遽召集されることになったのである。この被害によって軍首脳は、彭徳懷が率いる中国共産党軍の巧みな宣伝戦とゲリラ戦に脅威を抱き、それに対抗するために宣撫活動を本格的におこなうことに決めた。泰次郎の日記に「火を吹くやうな民衆獲得戦」という表現が見られるように、占領地でいかにして人心を掌握するかが日本軍にとっての大きな課題になっていた。軍司令部にある宣撫班本部によって、陽泉には渡辺登志夫を班長とする第二〇班が配置された。泰次郎のいた政治工作班の職務は、華北政務委員会の指導を受けた反共親日協力組織の新民会や軍特務班、憲兵隊などの協力を得ながら、山西省内の県公署および区公所、村公所の組織を指導することであった。「肉体の悪魔」のクライマックスで、張澤民が「私」から逃げようとしたのが村公所の裏山であったことが思い浮かぶ。

三

二〇〇六年一〇月二日から五日間の予定で、田村泰次郎の戦争小説の舞台を訪れるために中国山西省に出かけた。一〇月一日は日本の建国記念日に当たる国慶節で、中国の観光地はどこも、一週間の大型連休を楽しむ行楽客でにぎわっていた。北京国際空港で国内線に乗り換えて太原に向かい、約一時間のフライト時間で到着した。昨年に続いて今年も山西省国際旅行社の耿非祥氏に取材を協力してもらった予定になっており、耿氏は夜一〇時を過ぎた空港で出迎えてくれた。

太原到着の翌朝八時、昨年一〇月に開通した太原と長治を結ぶ太長高速道路を利用して南東に走った。途中の晋中市榆社県では巨大な火力発電所を目にし、山西省が石炭に加えて電力と鉄鋼の供給地としての役割を担っていることを実感した。現在、省政府は化学肥料やメチルアルコール、エチレン、ベンゼン、コールドールという五種類の基礎的製品の生産に対して集中的に投資し、石炭化学工業の持続的な発展に力を注いでいる。二〇〇五年から二〇〇七年までの投資額は九二・四億元（約一、四七八億円）で、売上高を五〇〇億元（約八、〇〇〇億円）にまで引き上げることが目標になっている。だがその結果、環境汚染もひどく汾河などの河川は工業用水の大量使用のために枯渇し、工場から排出される猛毒ガスのために一九九八年には太原市が大気汚染世界ワースト一に選ばれるという不名誉な事態におちいった。太原のホテルには、石炭や鉄鋼に関係する外国人技術者が大勢滞在しており、ロビーやレストランではドイツ語やロシア語が常時飛び交っている。

太原を出発し約四時間かけて長治市武郷県に到着し、太長道路を降りてすぐにある太行八路軍紀念館を訪問した。一九八八年にオープンした

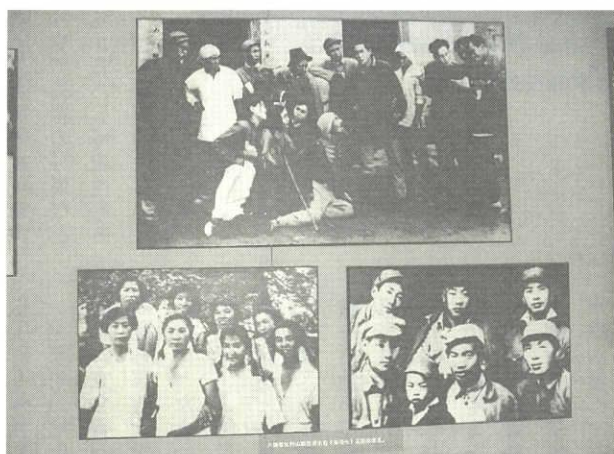


八路軍太行紀念館

紀念館は、けわしい太行山脈に抱かれるようにして建てられており、抗日戦争の時代に革命根拠地が形成されていた場所であることをしのばせる。総面積一八万平方メートル、建物面積は三、七七四平方メートルという巨大な館内の展示は、太行山脈を拠点とした八路軍の活動を中心に、抗日戦争の歴史を通観できるように工夫されている。朱徳や彭徳懷、劉伯承、鄧小平などの高級幹部に加えて薄一波や徐向前など山西省出身



八路军總司令部王家峪旧址



太行山劇団が上演した「血泪仇」の舞台や出演者



「太行山劇団演出結束後、合影留念」

（『太行革命根拠地画冊、山西人民出版社、1987年6月、65ページ）

の將軍の写真が飾られていた。遺品の実物に加えて写真や図版など二、〇〇〇点強の展示物のなかには、中国語で「惨案」と呼ばれる旧日本軍による虐殺事件の展示もあったが、広い館内の一室だけに限られており、誇張を交えたり反日感情をおおるような意図は全くなく、むしろ戦争で殺された犠牲者を追悼するためには必要なものとさえ感じられた。

午後は自動車で東に約四〇分、同じ武郷県にある八路军總司令部王家峪旧址に行った。丘陵地にある旧址は、一九三九年一〇月から抗日戦争を通じて八路軍の總司令部がおかれた場所で、一般的な四合院様式の農家の東棟には朱徳、南棟には左権、東院の西部屋には彭徳懷が宿営していたという。室内の展示は武郷県にあった八路軍の拠点を紹介する写真



抗日軍政大学総校蟠龍旧址

や図版が多く、「肉体の悪魔」で張澤民や陸緑英が誇らしげに語った八路軍の演劇運動に関する紹介もあった。たとえば文芸工作員の徐懋庸と高沐鴻、一二九師先鋒劇団責任者恐廓如、太行山劇団芸術指導員阮章竟の写真や、太行山劇団が上演した「血泪仇」の舞台や出演者の写真などで、このなかには張澤民のモデルとなった女性が写っている可能性もある。また旧址近くの村々には、「肉体の悪魔」では「火線劇団」という

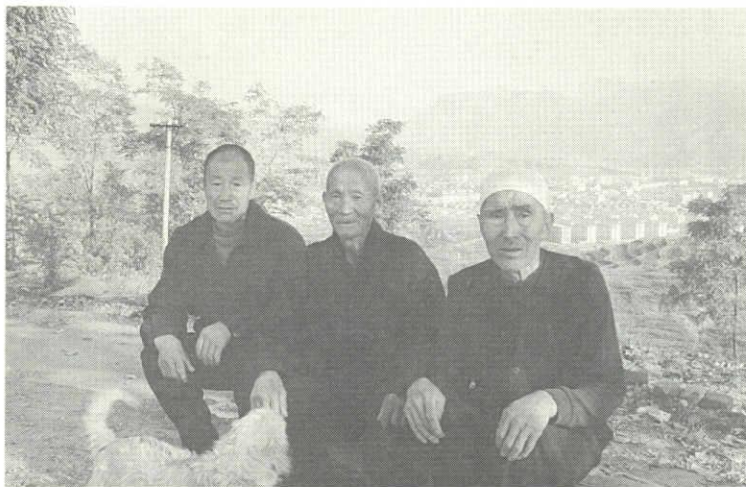
名前で登場する八路軍の「火星劇団」や、鲁迅芸術学校の実験劇団の拠点跡もあり、晋劇の伝統を持つ山西省内で、八路軍が劇団を活用して宣伝工作を積極的に展開していたことが分かる。

王家峪旧址を見学した後、武郷県内の蟠龍鎮にある抗日軍政大学総校旧址に立ち寄った。一九四〇年二月、毛沢東の指示によって延安にあった抗日軍政大学の分校を蟠龍鎮に設け、約四、九〇〇名の学生の教育をおこなったという。延安に移動しようとした彼らの動きを旧日本軍が察知して、学生たちを俘虜にしたという話は、泰次郎の小説「檻」〔新潮〕第四四卷一〇号、一九四七年一〇月〕の素材になっている。

午後二時すぎ、武郷県から東北に約五二キロメートル、国道二〇七号線を自動車で約一時間かけて晋中市左権県に移動した。左権県は、泰次郎が出征してすぐに配属された土地で、当時は遼県と呼ばれていたが、一九四二年五月、旧日本軍との激闘によって三七歳で戦死した八路軍参謀の名前をとって左権県と呼ばれるようになった。海拔三、〇〇〇メートル以上の峻峰が連なる太行山脈に抱かれるようにして県城がある。抗日戦争では革命根拠地がおかれた重要な地域でありながら、現在は生活水準が低く、衣食にもことかく「温飽」と呼ばれる最底辺の貧困層が多く在住している。

左権県の中心部は、八路軍総司令部がおかれていた麻田鎮からわずか四〇キロしかなく、泰次郎は配属されてすぐに「最前線の厳しい生活」を強いられた。とりわけ冬の寒さは厳しく、「気温は、ときに零下四十度を超え、地表下一メートルも凍った土は、最早、土というのではなくて、死んだ石かなにかのような感じであり、銃身には白い霜の花が咲き、夜歩哨に立つと、防寒帽には氷柱が垂れた」という（『わが文壇青春期』、一九六三年三月、新潮社）。

県城をとりまく小高い山には、泰次郎が哨戒の任務についたトーチカの跡があり、私はそこに立って往時をしのんだ。「肉体の悪魔」には喇嘛塔や南山、北斗台、夕陽台など分遣隊が派遣された陣地の名前が登場している。故郷から遠く離れ、八路军の急襲におびえながら酷寒に耐えなければならぬ生活は、兵士たちを苦しみの極限に追い付めた。八路軍のスパイの摘発をねらった「掃蕩」「清剿」作戦は多くの場合、一般



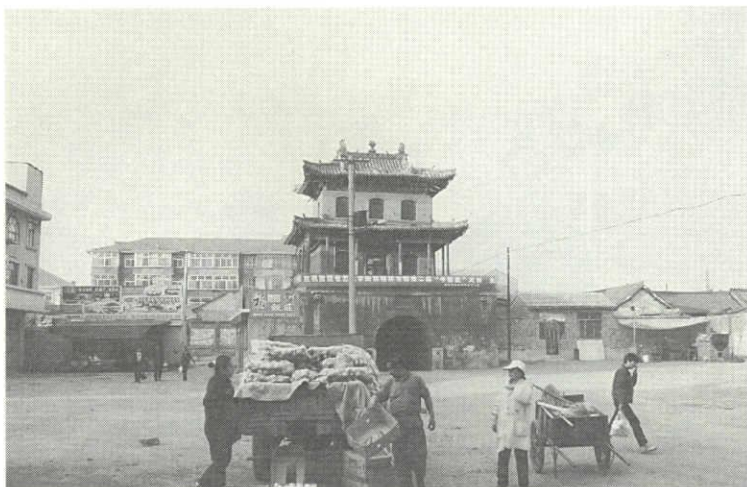
「七里河」での取材（左から曹明德さん、曹慶徳さん、李进才さん）

住民を巻き込んで「惨案」をまねいた。このような事件を起こした兵士たちを責める権利は、平和のなかで安眠している現代の私たちにはないが、厳しい生活のなかで次第に自己の良心を失い、軍の紀律に従って蛮行をくりかえすことでしか自己の存在をたしかめられなかった彼らの暴力の悲劇をくり返さない責任がある。

「肉体の悪魔」のクライマックスは、「私」と一緒に敵情の偵察に出かけていた張澤民が「私」の目を盗んで、村役場の裏山に逃げ込もうとする場面である。だが「私」はすぐに彼女を見つけ、拳銃の引き金に指をかける。あわや発砲かというシーンで、彼女は突然振り返って「私」という村で起こった事件とされているが、現地を訪れてみると実際にはそのような名前の村はなく、清漳河の支流を前にして三方を山に囲まれた「七里河村」が存在する。県城から七里の距離にあり、裏山に逃げ込むことも可能な村である。

そこで同村を訪れ、曹明德さん（六六歳）および曹慶徳さん（七七歳）、李进才さん（七一歳）に抗日戦争時代のことを尋ねてみた。彼らによれば当時、村人たちは、裏山の頂上に設けられたトーチカに宿営していた旧日本軍兵士のために、毎日井戸から水を汲んで運び、トーチカの修理を手伝った。憲兵隊に連行されたり、親戚が殺されたりする事件もあったが、県城の内外であったとされる「惨案」は、この村ではなかったらしい。そのため彼らは比較的穏やかな表情で私の取材に応じてくれた。

七里河村での取材を終えて、左権県の県城中心部に立ち寄った。古い町並みが遺っている県城の西側は、先に紹介した独立歩兵第一三大隊第一中隊の山本中隊長の守備担当地域であった。石田米子氏は周到な現地調査にもとづいて「明確に山本隊長の名が出て来ない場合にも、こうし



晋中市左権県の県城遺構

た記録に残る被害の現場は県城の西側、ないしは西方向の要衝で発生している」と指摘している⁵。県城の東側と南側は第二中隊の守備担当地域で、同隊に所属していた近藤一氏は、新兵教育として中国人捕虜の「刺突」訓練を東南角広場で体験したことを証言している⁶。県城の外で度々おこなわれた「惨案」については、『侵華日軍在山西的暴行』（中共山西省委党史研究室編）や『日本侵晋実録』（山西省史志研究院編）

など多くの文献でたしかめることができる。現地の人々の間にも、それらの事件は今も深い傷痕を遺しており、戦争の記憶は世代をこえて語り継がれている。

午後五時をすぎると左権県で取材をした後、国道二〇七号線を南下して長治市黎城県に向かった。昨年九月に山西省を訪れたときには、工事や崖崩れに加えて、大型のトラックからこぼれた石炭が散乱していたり、路面に穴があいていたりと、大いに難渋したのであったが、今年は路面がきれいに舗装されており、スムーズに通行することができた。太行山脈の峰伝いに走って約六五キロメートルの距離を二時間強、長治市黎城県に到着したときには、日が落ちてすっかり暗くなった後であった。ホテルでは耿非祥氏から山西省の抗日戦争時代や文化大革命時代に関する話をいくつか聞いた。耿氏が山西大学外国語学院日本語学科で指導を受け、二〇〇二年に七八歳で亡くなった孫鳳翔元教授は、戦前は日本に留学し、国民党軍閥の閻錫山の山西政府で通訳を務めたことがあった。太原で戦犯裁判が開かれたときには裁判所の通訳を務め、残留日本人孤児の救援にも尽力した。だが文化大革命がはじまると、元国民党関係者および日本のスパイとして告発されて炭鉱労働に下放、妻子と別れ自己批判を一方的に強いられた生活が一〇年以上続いたという。耿氏が山西大学で指導を受けたもう一人の日本語教師、今年七十六歳になる曹石堂元教授も二〇年以上下放された。当時、日本語が話せるだけで日本のスパイとして告発されたという。

さらに一九六四年生まれの耿氏によれば、一九六〇年の大飢饉では食べるものがなくなって石まで食べたというし、自分が幼かった頃も食料が欠乏しており、アワの殻を擦って食べていたが、殻までなくなってしまうことも多々あったという。娯楽は月一回の映画上演会だけで、抗日

戦争をテーマにしたモノクロ映画を、日が暮れてから露天の広場に集って、寒さで足を震わせながら観た。映画のなかで覚えた日本語は「日本鬼子」が使う「バカヤロー」という言葉であったという。戦後まもなく高度経済成長をとげて、過去の歴史を忘れてしまった日本社会に比べて、八〇年代の改革開放の時代まで長く苦難の日々が続いた中国人民の歴史の重さを感じさせられた。

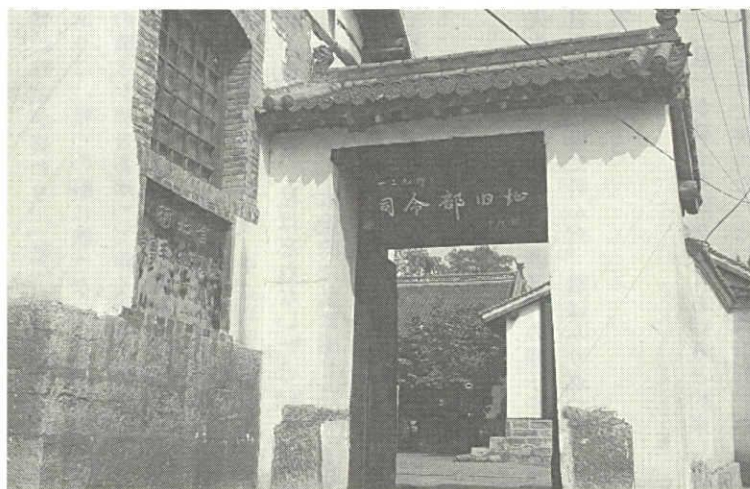
四

旅行三日目は朝八時三〇分に黎城県を出発して、長治と邯鄲とを結ぶ長邯道路を通って、河北省邯鄲市渉県に向かった。高速道路にも石炭を登載した大型トラックが走っていることに驚いたが、さしたる渋滞もなく約一時間で到着した。山西省からみればちょうど太行山脈の裏側になる河北省邯鄲市渉県赤岸村には、総面積一八三四・一平方メートルのなかに八路军第一二九師の司令部址が遺されている。一九四〇年一月以来、五年にわたって同村に司令部がおかれ、四合院様式の農家三戸には、劉伯承師長および鄧小平政務委員、李達將軍が宿営していた。一九九四年に建物面積七、二五二平方メートルの陳列館がオープンし、遺品の実物をはじめとして写真や図版などが展示されていた。そのなかに八路军の文芸団体としてつぎのような劇団の名前があげられていた。

名称	単位
火星劇団	八路军総部
太行山劇団	八路军総部
先鋒劇団	一二九師

野火劇団	一二九師三八六旅
実験劇団	野政
抗日劇社	晋冀魯豫軍区
文工団	一二九師

このように多くの劇団があったことを考えれば、八路军が演劇運動を



河北省邯鄲市渉県赤岸村の第129師司令部址

通じて民衆の人心をつかもうとしていたことが分かる。張澤民、そして彼女のモデルの一人王澤民は太行山劇団員として芝居を月に二、三回上演しながら山岳地帯を転々とする生活を送っていたのである。

「肉体の悪魔」で張澤民が渉県附近のことを「私」に話して聞かせる場面がある。「私」は彼女の話に共感し、「漳河に沿うた太行山中は私たちも作戦で歩きまわった地域であり、渉県こそ知らないが、君の話を聞きながら、あの漳河の清らかな流れ、崖下の通、白壁の部落、部落をとりまく棗の木のことなどをなつかしく思ひだした」という。一九四三年春の太行作戦（四月二〇日から五月二二日）で太行山脈をこえて山西省から河北省に侵攻した「私」は、苛酷な戦闘を続けながら、張澤民から聞いた話を心のなかで甦らせ、「生きて帰つたらこんどこそ素直に素直に」「君の前に自分の心を打ちあけて、二人の心のままにどういふやうにでもなつてしまはう」と決心していた。

初夏の風に揺れる棗の葉の眩しいきらめき、河岸の断崖の黄土の縞の色、人一人ゐない部落の壁に書かれた抗日文字、——さういつた風物の前に、私は君の姿を立たせてゐるのだつた。太行山中のどんなところにも、君の幻はゐた。棗の葉を揺する微風の中に、麦の穂波の中に、君の笑ひ声が聞えた。——けれども、一人の兵隊のそんな甘つたれた感傷など、戦闘の仮借のないきびしさの中では何にならう、味方の死傷がふえると共にいよいよ血に狂つたやうな日本軍の行動は私たちをひきずりまはし、私たちは心身共に疲れ果てた。

右の最後に「血に狂つたやうな日本軍の行動」という表現が見られる。『侵華日軍在山西的暴行』の巻末にある「侵晋日軍暴行大事記」（年表）

の一九四三年五月の項目には、「掃蕩太行ノ日軍」が省内で一般住民を「屠殺」したという記録が五件にわたって収載されている。「屠殺」とは日本語で「虐殺」を意味する中国語で、長治市黎城県では七〇〇余人が縄の轡をはめられ刀で刺された後に井戸に投げ込まれるという常軌を逸した殺され方をしたとある。わずか数行の表現でしかないが、泰次郎の小説の背景には、このように決して看過することのできない事実が横たわっている。

三ヶ月目に作戦が終わり、「私」は旅団司令部のあった陽泉に帰還する。久しぶりに「私」の眼に映ったのは「宿舍の院子は夾竹桃が満開だった。火の噴水が噴きあがつてゐるやうなその花のために、しんとした院子のなかの空気までが赤い色で染まつた」ような光景であった。背囊を降ろし上半身裸になって洗面器の水で体を拭いていると背後に人の気配がし、振り返ってみれば、そこに張澤民が立っていた。「ああ、あのときの君の眼の光を、私は忘れない」というほど強い衝撃を受け、「私は愛されてゐる、——本能的に私は感じた」。まるで「焰のやうな花を背景に立つた君の肢体自身が、火焰のやうだつた」という。挨拶をかわすだけで耳まで紅潮させ、そのまま自分の部屋に帰ろうとする張に声をかける。

「張先生、あとで渉県や、譚音村の様子を聞かせてあげるよ、——」
私は君のうしろ姿に叫んだ。君はふり返つて、につこりとうれしさに笑つた。

ここで、「私」が様子を聞かせてあげると約束して、張澤民が「につこりとうれしさに笑つた」という「譚音村」はどこにあるのだろうか。

現地で調べてみると、実際には「譚音村」という名前の村はなく「彈音村」が存在する。「譚」と「彈」とは中国語で同じ発音をする文字である。涉県彈音村は白い砂礫の多い漳河をはさんで八路军第一二九師司令部の向かい側にあり、当時は中国共産党晋冀魯豫辺区政府がおかれていた。「私」は張澤民が「晋冀魯豫辺区政府教育庁」で働いていたことを「君自身の口から自然に聞くことができ」、「どんな日常を過ごしてゐる



河北省邯鄲市涉県彈音村の晋冀魯豫辺区政府旧址

か、それを聞くことは私たちに面白かった」とある。彼女が「につこりとうれしさうに笑った」のは、かつて自分が務めていた辺区政府の現状を聞くことができると思ったからで、今は囚われの身であっても、中共政府に対する忠誠心は依然として失ってはいなかったのである。

五

午後、彈音村を出発し再び長治市に戻って、太長道路を利用し約五時間かかって太原に戻った。翌日は市内から西南に二五キロ、懸壺山の麓にある晋祠に出かけた。晋祠は西周初期（紀元前一世紀）に兄の成王から同地を領地として与えられた叔虞を記念して北魏代に創建されたものである。後年になって領内に流れる「晋水」という川の名前から国号が唐から「晋」に変更され、それに合わせて「晋主祠」、「晋祠」と呼ばれるようになった。このような宗教的建造物のある静かな場所にも旧日本軍が侵攻し駐屯していたという。

「恨み」を晴らそうと思って、過去の記憶を語るのではない。ただ犠牲になった無数の人々を悼み、再び戦争を起こさないための「戒め」にするために語るのだ、という言葉を現地の人から聞くことができた。

「惨案」によって殺された農民も、異国の地で無念の裡に戦死した兵士たちも、ふだんはひとりの人間として平穏に暮らしていたはずで、彼らの人生を大きくゆがめた戦争の暴力を決して許してはならない。

註

- (1) 防衛庁防衛研究所戦史室編『北支の治安戦2』（一九七一年、朝雲新聞社、一九三頁）
- (2) 石田米子「山西省の人々の記憶・記録の中の独混四旅十三大隊」『ある日本兵の二つの戦場―近藤一の終わらない戦争』、二〇〇五年一月、社会評論社）
- (3) 前掲（1）と同書、一九四頁
- (4) 田村泰次郎「破壊された女」『女拓』、一九六四年十二月、中央公論社）
- (5) 前掲（2）、三七―頁
- (6) 前掲（2）、五五―五六頁

資料紹介 田村泰次郎「和平劇団日記」

「NOTEBOOK」薄紫・布張の手帳に一九四一年六月二三日―九月一六日までの記録が記されている。内容には山西省陽泉の憲兵隊の検閲がおこなわれ「検閲済陽憲」という印が押されている。泰次郎が所属した独立混成第四旅団の旅団長は片山省太郎で、陽泉に旅団司令部が設けられていた。泰次郎は旅団本部の宣撫班に配属され、営外の街中にある公館で中国共産党軍の捕虜たちとともに起居していた。和平劇団の監督および制作者の立場から芝居の練習から上演に至るまで一手に劇団運営の業務を引き受けており、抗日戦争で中国共産党の演劇による宣伝活動をしていた捕虜たちを反共の宣撫班員として利用しようとしていた。

〔参考〕

- 政治工作班編成表 昭一六・八・一三 班長 中尉 勝川正義（憲兵一 下士官二 上等兵一 一等兵三） このとき泰次郎は一等兵。
- ・（日本兵八 日本人軍属一 中国人一八）
- 凡例
- ・三重県立図書館司書の鈴木昌司氏の翻刻資料に適宜修正を加えて注を付した。

- ・□は判読不明の文字
- ・「」は推定で補っている。

和平劇団日記（「NOTEBOOK」薄紫・布張、タテ二〇センチ×ヨコ一五センチ、縦書き）

和平劇団 十六年夏 「検閲済陽憲」（印）

〔資料 孔版〕

政治工作班編成表	昭一六・八・十三
区分	階級 氏名 摘要
班長	中尉 勝川正義
憲兵	軍 小林芳俊
伍	車谷 薫
長	浅井信夫
上	小林一郎
一	田村泰次郎
	山中古美
	河村義平
	鍋田 博
	新井茂平
新民会日系	鍋田 博
先鋒隊長	韓春秀
新民会華系	李 讐全
通訳	尚金生
先鋒隊	李 財
〃	□ 立明
〃	張世英
〃	廉從礼
〃	張 琦
〃	強世文
〃	李現和

王愛享
高青山
李華富
卜培雲
李吉良
宋刀云
趙保秋
李連書
張復生 (中原会戦捕虜) 山東人
中央軍陸軍第五集團軍所屬第十二師司令部中尉
李九貴 山西軍 伍長

六月二十三日、昔陽卷峪溝 (昔陽西方四二杆) 警備隊で一ヶ月前 (五月二十三日俘虜) に捕へた敵第三專員公署所屬の劇団 (太行山劇団第二分団) の団員十名来る。女二名。少年一名。陽泉劇場で、勝川少尉ら一寸芝居させて見る。善木曹長と自分、町へ昼食をたべさせにつれて行く。よく食ふ。麵を四枚食つたのもゐた。あまり汚いので、はじめて見たときはおどろいた。山から山を毎日猿のやうに歩いてゐたとか。芝居は月二、三回、廊のやうなところや、高台で催すらしい。後は日本軍に迫はれたりして、山嶽地を遊動してゐたらしい。食物もひどかつたと。事変以来三年間つづけて来てゐて、総勢三十五名とか、旧劇の大一座なり。夜、軍楽隊の演奏、陽泉クラブであるので、つれて行つて、聞かせる。

六月二十四日、野戦倉庫へ彼らをつれて行つて、粟、白麵を受領する。戦斗で負傷した少年 (左腕の貫通) と足部化膿の青年とをつれ、軍医部で治療を頼む。彼らの軍隊式訓練にはたまげた。十五才の少年も五十才の老頭兄も、一様に整列する。

六月二十五日 勝川少尉、精勤教育に通訳をつれて出かけたらしい。支那茶を五十銭買ひ、彼らに与へる。劇団長の鄭にいつて置いた劇団員の姓名表が出来てゐる。

注 「肉体の悪魔」の小野田中尉は、班長の勝山正義中尉がモデルである。田村泰次郎はこのとき一等兵。昔陽は山西省晋中市昔陽県、清河の東源地。一九四一年、独立第四旅団は中原作戦 (五月七日〜六月一日) を実施し、南部太行、中条山脈に拠点をおく衛立煌の中国共産党軍を包圍し攻撃した。さらに第二次晋察冀辺区肅正作戦 (八月一日〜一〇月一日) を実施し、聶榮臻司令官の中国共産党軍を攻撃した。

(資料手書き) 太行山劇団第二分団姓名表 (十四名)

職制	姓名	年齢	性別	籍貫	學歷	備考
團長	李浴橙	二〇	男	昔陽県城裡	高級小学校肄業	兼任旧劇指導
隊長	鄭彦根	二三	男	和順県串村	太原私立友仁中学肄業	兼任音楽及歌詠指導

團員 畢世寬 二〇 男 和順県南関 高級小学校肄業 話劇演員

馬小五 二〇 男 和順県后略村 初小三年 旧型劇演員

郭慶泰 二一 男 五台県郭家寨 高級小学校肄業 話劇演員吹笛子

馬来田 一五 男 和順県北関 初級小学校肄業 舞蹈

超二元 三〇 男 太谷県東関 讀書五年 旧型劇演員

王澤民 一八 女 和順県西関 高級小学校肄業 話劇演員

南玉英 二〇 女 榆次県東巷村 未曾讀書但疎通文字 話劇及旧型劇演員

張杯礼 四二 男 河北省井陘県南張城 未曾讀書 旧劇音楽拉胡声

李成合 五八 男 榆次県小越村 未曾讀書 旧劇音楽拉胡声

事務員 笹魁文 三〇 男 昔陽県阜落鎮 讀書一年 旧劇音楽拉胡声

火夫 曹月全 五四 男 和順県東関 未曾讀書 旧劇音楽拉胡声

朱宝玉 三五 男 河北省南楽県朱家村 未曾讀書 旧劇音楽拉胡声

六月二十六日、特ムキ関の軍属の人 (もと僧侶とか)、毎日、勝川少尉に頼まれたとかいつて、精勤訓練するらしい。煙草をこつそり持つて行つてやる。酒賃通訳と行き、彼らをして、それぞれ故郷に手紙をかかせるやうにする。便箋、封筒は、北京の李香蘭君の家から贈られた支那式のもの。彼らの役に立つならば、

便箋、封筒も生きるだらう。すこしづつ、自分になつて来る。

六月二十七日、

朝、軍医部へ、治療患者二名をつれて来る途中、街で、玉葱と、芹のやうなもの五十銭買つて与へる。彼らの囊中一文もないのを考へると、可哀さうで仕方がない。

六月二十八日

今日は本部宮庭で戦没将兵の慰霊祭があるので、軍医部へ、治療患者をつれて来るのは午後にする。朝、彼らの宿舍へ行つてそれをいふと、おとなしくうなづく。今日は殊に腕が痛むといふ。この暑気で、化膿が悪化したのだらうか。

自分の顔を見て、すこし笑ひかけるやうになつて来た。うれしい。彼らのためには、自分は一兵士ではあるが、出来るだけのことは、してやりたいと思ふ。

「毛三爺」の脚本を渡す。話劇は不得手だといふのを、下手でもかまはんといつて、やらせることにする。夕方、午後九時頃、彼らのところへ行き、全部つれて、陽泉の街を歩き、河原へ行つて、遊ぶ。まだ明るい。灯のついた街へ、杏を小夜子と姑娘とに、五十銭山中が与へて、買ひにやる。それを買つて来て、みんなに分ける。杏を食ひながら、黄昏れて行く河原で、歌をうたふ。みんな、本当に楽しげにふるまふ。南、王、両女、抗日歌「黄水謠」、それから「送情郎」をうたふ。

ハーマニカを四個、太原へ頼んであつたのが来たので、与へる。彼らは早速それにとびついて吹きだした。

六月一日

言葉のわからない支那人の劇団をつくりあげるのは骨が折れる。けれども、自分は何んな努力をしても、こいつを物にしたい。敵側では総員三十五名から四十名近くゐたらしい。月一回ぐらゐ芝居をして、あとは山を移動してゐたといふ、その執拗な民族意識を、自分をかへつて頼もしく思ふ。今日はじめて、拙い支那語で、日本人と君たちとは、朋友でなければいかんといふ。

歌の本を買つてやる。

夜、酒賀通訳と一緒に、彼らを河原へ連れて行き、稽占する。雨上がりの河原

では、濁流が唸りながら流れてゐる。その石ころだらけのところ、^{マニ}「毛三爺」を稽占する。自分は、何もかも鄭（劇団長）に任せて、いいはない。いろいろ、演技の上でもいひたいことがあるけれど、支那人の舞台での習慣、約束もあるだらう、当分何もしないことにする。演技する彼らは本当に楽しさうだ。いつもの憂鬱さうな顔付も、そのときだけは消え、笑ひ声など高らかにひびく。

七月二日

昨日、鄭に、背景、道具類の必要品を書き抜いて置くやうにいつて置いたら、今日早速書いてゐる。つぎのやうだ。

支那芝居の道具は平定東門裡和義成といふ店に行かなければならぬ。

六月三日

夜、新民会へ来て、「毛三爺」をやる。「新カンティン」をつくつて来る。

六月四日

独ソ開戦を知つてゐる。どこで誰に聞いたのか。新聞を見せ、独ソ国境地帯の地図を見せると、片仮名でモスコイを書いてあるのが読めない筈なのに、「モスク」と指さしている。彼らの赤色教育も相当なものらしい。

「現代文学」を送つて来たのを見て、中国の現代文学について何かいふ。今日は幕について相談した。

歌をつくつて来たといつて見せる。例によつて譜がついてゐる。

「我們奮闘在亞洲上」

我們奮闘在亞洲上

在這兒看到英美的瘋狂、看到共匪的搗亂、在這兒看到黃族的危難、看到人民的可憐。

我們的歌声、我們的吼声、是為求東亞的和平、為建立東亞的新秩序。我們奮闘在亞洲上。

我ら奮はん亜細亜に在りて

英米は狂氣に触れ、共匪は乱脈を棲む、黄族は危難に瀕し、民族は可憐を極む

我らの歌は、我らの声は求めてやまず、東亜和平、挙りて建てむ、新秩序
我らは奮はん、亜細亜に在りて

七月五日

「和平劇団」といふ名に、きまつたさうだ。将校の人たちが相談して、投票で決めたらしい。ほかに、晋中劇団、「東亜劇団」「滅英劇団」といふ名もあつたさうだ。「和平劇団」といふ名も、すこしぼんやりしてゐる
やうに思つてゐたが、それにきまつたとしてみると、案外はつきりしてもゐるやうだ。

七月七日

事変記念日。劇団員の食糧、明日一日で全部なくなるとのこと。支那楽器を商務会から借りて来て、支那劇をやる。喧しい音楽だけれど、中国人のこれを好むは想像以上なものあり。沢山の支那人あらはれ、自分は殆ど、片隅に存在を失ひさうであつた。はいつていけない、民族のちから、さういふものを感じて、寂しくなつてゐた。打ちのめされた気持。けれど、新しい勇氣となる事起さう。

七月八日

今日、民需物資ノ伝票ヲ貰ツテ、野戦倉庫へ白麵、小米ト取りニ行ク。
夜、横田中尉、勝川少尉、新民会デ、劇団員ノ稽古ヲ見ル。

七月九日

勝川少尉、犬飼一ト兵ト劇団員ノ靴ヲ買ヒニ行ク。一足二円五十銭ノヲ、沢山買フトイフノデ、二円二十五銭二負ケル。劇団員二聞クト、敵地区デハ一足十五円カラスルサウダ。二月デ三円五十銭ノ被服手当ガアツタサウダケド、トテモ手ニ入ラナイ。劇団二ハ、モト鞋ヲツクル人間ガキテ、カレガ縫ツテキタサウダ。
夜、風呂ニツレテ行ク。

注 猿江上等兵のモデルであつた犬飼一等兵が登場している。

七月十日 今日ハ、彼ラノ故郷へ出シタ手紙ノ返事来ル。三名（馬來田、王澤民、

馬小五）デアル。夜、劇団用ノ扉幕ノ模様ニツイテ、議論スル。犬飼「姑娘ノ胡弓ヒクトコロドウカ」田村「山中ノ農民タチガ見ルノナラ、モウスコシ何カナイカ。滅共反英ノ闘争的ナモノニスルカ、ソレトモ、楽土ヲ現スモノニスルカ」
「ミンナソレゾレ生業ヲ染シンデキルトコロヲ、影絵ノヤウナキリ抜き式デシタラドウカ」「支那人ハ働イテキルトコロヨリモ、クウタリウタシテキル方ガ染土ダラウ。何ンセ阿片ヲ吸ツテ寝転ンデキルノガ一番極楽ダラウカ」「駱駝ガ並ンデキルトコロハドウカナ？」「イヤ、駱駝、驢馬ハ敵地区ノ輸送機関ヂヤナイカ。コチラハ汽車、火車デ、モツバラソレガ輸送力豊富ツイフコトデ、楽土ノ象徵ニナルノデハナイカ」

七月十一日

今日は、白塩がよいといふ。明日は早速白塩を買つてやらなければならない。粟、白麵、青菜に調味料といつては、塩だけだ。この辺の住民は、これでよく栄養が保てるものである。とにかく、彼らにとつて、塩は必要欠くべからざるものらしい。今日隊長の書いたものにも、敵地区では塩がろくに得られないといつてゐるところを見ると、塩は貴重品らしい。

〔資料手書き〕 和平劇団作息時間表（夏季） 日課表

- 1 起床 六
- 2 早操（散歩或深呼吸） 六・三〇—七
- 3 発音 七・一〇—七・三〇
- 4 自習 七・三〇—八
- 5 早飯 八
- 6 唱歌 九—一〇
- 7 上課 一〇—一二
- 8 午飯 一二
- 9 午睡 一—三・三〇
- 10 排演（劇・舞） 三・三〇—六・五〇
- 11 晩飯 七
- 12 音楽練習 八—八・四〇

表 1

	日	土	金	木	水	火	月
10—11	休暇一日	日語	日語	日語	日語	日語	日語
11—12		衛生	美術	戲劇	自然	音樂	舞台
		常課	常課	常課	常課	常課	常課

- 13 練歌 八・四〇—九
14 自習 九—九・五〇
15 睡覺 一〇

〔資料 手書き〕 毛三爺與釘紅用具單／「毛三爺劇」及「釘紅劇」舞台用具

七月十五日

昨日から、朱、もう一人、不要なので、どこかで使つて貰へるか、帰してくれないかと劇団長にはれる。

置いて置いても仕方がないといふのであるが、新しい人員をそれだけ入れれば、劇団がそれだけ拡充されるわけである。勝川少尉殿、善木曹長殿に話したところ、何とかするといふ。帰りたければ帰してもいいとのことであるが、一人は河北省で、とても帰れない。一人は昔陽県人である。

劇団用の伝單、プログラムを楊に書かせて、印刷屋で刷らせる。

今日から、自分のつくつた治安強化脚本「郷土英雄」を稽古する。十八日には閣下はじめ大人に見て戴くらしい。脚本は通訳の人たちと鄭とが三日かかつて訳した。

畢、今日は腕が痛いといふ。馬小五、五日間便通なしといふ。帰りに馬小技は「サヨナラ」と日本語ではじめていつた。

今日、稽古中に自分の襦袢のボタンがとれた。それを見て、南はすぐと針と糸とをだしてつけてくれた。この間、自分がやつた針と糸だ。彼女たちは、これで、犬飼一卜兵の画いた劇団の徽章（丸い中に和平とセピア色で抜きだしてある）を、黒く染めた帽子に縫ひつけた。

七月十六日

今日は新しい衣装を与へる。

七月十七日

畢の痛みますます烈しいといふ。今日は軍医部の診断に患者が多く、それを待つまに、強気な彼が泣きだしさうにしてゐた。煙草をすすめると、「不好」といふ。

鄭と、松脂、色粉、毛糸などを買い廻る。酒精は軍医部より貰ふ。ウイスキの瓶に入れる。松脂と酒精とで、何か顔料を制作するらしい。毛糸はないので、羊毛（黒、自）を貰ひ、鬚をつくらせる。夜、稽古。痛みの中に、畢、熱演。「郷土英雄」もセリフをすでに覚えて熱演。暗い灯の下で、紅槍の朱さ閃く。

〔資料 活版〕 和平劇団首次大公演目次（裏面 歌詠歌詞）
反共話劇「毛三爺」 李恕忠作

毛三爺——畢世実

毛夫人——王澤民

毛子——馬來田

毛女——南玉英

張媽——趙二元

八路軍正太大隊長——馬小五

副隊長——鄭彥楨

強化治安世話劇「郷土英雄」 振亜作

陳振華（自衛団）——畢世実

高——（々）馬小五

劉——（々）趙二元

朱子桂（村長） 鄭彥楨

偽県政府吏員——郭慶泰

敵工作員——南玉英

陳母——王澤民

旧型歌劇「新釘缸」 鄭彥楨

張大——趙二元

王員外——曹月全

王翠英——南玉英

八路軍——馬小五

歌詠

我們奮闘在亞洲上

和平反共小調

明朗世界

合力興東亜

舞曲

航空舞（馬來田）

〔資料〕 和平劇団成立第一回公演二際シテ代表 鄭彦根

七月十九日

昨夜は犬飼一ト兵背景幕で徹夜、山中一ト兵と自分とは準備に終日走り廻る。

七月二十日 今日日は初日。三時開演がまだ人が来ないと心配しても、時計を見ると、また二時だ。二時半にもまだ半分も来ない。今日は小陽泉で、廟会があり、支那芝居（旧劇）があつて、その方へ民衆が行つてゐるらしく、すこしはすくないかも知れないと、新民会の人がいふ。最初の日だから、彼らの意気をあげるために、客が一人でも多く来てほしい。勝川少尉も、ちよつと心配さうだ。楽屋で、汗だくの中に扮装はじまる。はじめ、楽屋へはいつておどろいた。何もかもきちんとしてゐて、いかにも三年間、敵地区でやつて来たことがわかる。鄭が生活隊長とあつたが、その意味がわかる。ソヴェトの訓練方法なのかも知れない。ドイツではさういふ言葉がありさうだ。つまり生活指導者といふ意味だ。日本でも生活指導部といふのが、翼賛会にあるらしいから、さういふのが、世紀の欲求なのだらう。つまり、けれども、彼ら中国人の生活指導といつても、われわれ軍隊の規律からいつたらまだ生ぬるいものであるが、一般中国人、それも山間僻地の老百姓の間にさういふものがあるといふことが、注目すべきこと。みんな元気で、演目すすむ。三時開演の頃は、案ずるまでもなく、満員。商務会長、衛公署長、警察署長、塩務局長も来る。

劇場内割れるやうな熱狂のうちに、終る。

二十一日

今日も三時から開演。入場人員八百名（中国人）

二十二日 今日日は片山閣下が見られる。午後七時半開演 閣下は七時四十分から約三十分、恰度「新釘缸」を見られる。今日は兵隊だけが見ることになつてゐたのだが、定刻になると、中国人がどんどん押し寄せ、下士官席にとつて置いた二階の左側から下の方を一杯に占める。定刻すぎ、続々と兵隊来る。すこし暑い夜ではあるが、立錐の余地もない大入満員に、場内はむせて呼吸ぐるしい。今日はまた全員熱演だ。畢は痛いのを我慢して頑張つてゐる。夜はねてから、明朝七時半、平定に出発、そこで演ずるやうにと、勝川少尉殿からいはれる。帰つて寝たのが十二時。

注 片山閣下とは独立第四旅団の旅団長片山省太郎中将。

二十三日

六時半起床すると、すぐ軍医部へ行き、衛生兵に頼んで薬を貰ふ。今日は支那の便衣で行けといはれ、便衣に銃を「担」いだ姿で、トラックに乗る。山「黒」さんに、拳銃を持つて行けと渡される。一台のトラックがうまく行かず、途中故障を起し、遂に善木曹長は、車の前にまたがつて、ガソリンをつぎつき、坂道を走る。出発八時過ぎ九時、平定につく。新民会次長の野崎さんが小生はいろいろ世話してくれる。小生は腹を毀してゐるのでうどん一杯で我慢する。百三十度の炎天下で、熱演。県知事の广播放送致辞がある。「治安強化」の熱弁。興亜促進隊の連中の口演。楽屋で、南が小さな箱を抱へて、それに顔を寄せ、何かぶつぶついつてゐるのを見る。雀をこへまで持つて来たのだ。すんで、県公署へ行く。途中、「漢淮陰侯韓信下越駐兵処」といふ碑を見る。大分石槽りをつたらしく、碑の表面が黒くなつてゐる。超（直隸、河北、山西にまたがる国）を降したとき股ぐりの韓信の駐兵した遺蹟らしい。県公署の県知事の部屋の前庭には幾抱へもある大木がある。聞くに、「唐朝から」と、案内の吏員答へる。県知事に逢ひ、劇団員に寄附をくれるといふので立ちあふ。県知事は藍？林といふ名だ。帰りは別のトラックで、五時半帰隊。拡声器の調子もうまく行つたが、山中一ト兵、善木曹長、安井一ト兵は、汗だくになつて、ホームライトと取つ組んだ。

七月二十五日、

寿陽へ行く。今日も便衣。千人針を「袴」子に巻きつける。貨車に荷物を積み込み、劇団員と一緒にごろごろ横はる。車に乗るとき、「こら、早くはいれ」といつて、地方人に、うしろから押された。兵隊と知らないらしい。汽車の中で、彼らは汽車に乗るのがはじめてらしく、「漁光曲」、「囚徒」、「松花江」を唄ふ。合唱高まり、貨車の中にひびき渡る。朝の間の美しい陽ざしが、貨車の中まではいりこんで来る。昼近くなり、やうやく灼熱となり、峨峨たる山岳地帯を、列車はのぼつて行く。灼けて輝く赤土。岩の肌。十二時寿陽着。街中が蘇省長歓迎で賑はつてゐる。今日は治安強化運動民衆大会のあることをはじめて知る。私たちはその日の催しの一つとして、急にこちらへ廻されたのだ。相変らず南は雀の箱を持ち歩いてゐる。今日は城内の廊で演じる。畢を新民会の施療所へつれて行く。綾部軍曹、木田次長など世話して貰ふ。善木曹長殿、今日は中国人巡査に咎められる。にやにや笑つてゐる。「これで黙つてゐればもういいんだ」と。夜、連絡をとると、七時、娘子関へ行くことになつたといふ。

七月二十六日

装甲列車にて、まだ明けやらぬ山地を走る。寒い。青草に蓋はれた大地表の美しさ。無蓋車で寝る。陽泉で、饅頭や、乗車券の手配に、松井、人見ら苦心してくる。新民会のボーイは、百人分饅頭を持つて来てくれる。白羊野で、荷物を乗せた貨車を切離したので、下車。瓜を食ふ。モーターカー、来て、自分だけ資材、劇団員と先発、娘子関へ行く。二時間ほどして、装甲車来る。残りのもの来る。太原の愛路少年隊が天幕露営をしてゐる。舞台が貧弱だといふのを、そんなことはどうでもいいといひきかす。林檎と杏の合の子のやうな味のする、小さな林檎を食ふ。美しいプール。泳ぐ、芝居は成功。

六月二十七日 十一時の交通列車で陽泉に帰るといふので、娘子関へ行き、みんなで写真を撮る。陽泉に帰り、今日は御馳走しようといふので、福順旅館で、白（パイ）酒をのみながら鰯腹食ふ。敵地区では、酒が飲めないといふので、アルコールに対して抵抗力がないのか、みんなすぐと酔つてしまひ、就中、×酔つて、手がつけられない。「みんな、お前たち、共産党の癖に表面だけ装つたつて駄目だ」といふ。と通訳さんの話。察するに、彼の平素の行動などとも照り合せ

て見ると、彼は生れつきの芝居好きなのが、それで抗日劇団が組織されたときひつばられたのだが、思想的な頭はないが、演技には自信がある。それを、イデオロギーだけの連中が（その中には鄭のやうな存在もあるだらう）彼らを抑へつけてゐるのが敵地区にあるときから癪にさわつてゐるのだらう。問題は深く、複雑だ。雷雨あり。夜、上社鎮襲撃の報はいる。

二十七日 今日日は日曜日、一日休養。趙はどうしてゐるかと思ふ。郭、鄭、畢とつれだつて、治療に來たけれど、何もきかなかつた。鄭は急性血膜炎。

二十八日

朝になつて、勝川少尉から、今日は山中一人が新民会鍋田、ケイさんたちと昔陽へ行けといはれる。自分は残される

〔資料〕鄭彦根作詞並二編曲 和平反共歌謡集（日記）和平劇団
〔資料 手書き〕新編 歌詞一冊 鄭彦根編

政治工作班

宣伝班兵二

憲兵一

配属兵三

先鋒隊一七

俘虜（逆用）二三 劇団一四 馬夫一三

七二名

馬 一三頭

八月十四日 今日には部隊が行動を起す日、陽泉は午後八時から交通遮断。政治工作班は今夜十二時出発。和平劇団も一緒だ。昔陽新民会の先鋒工作隊、憲兵、劇団、宣伝班が、政治工作班要員だ。暗黒の人通り絶えた街を出発する。私は、明日の朝六時の自動車で、勝川少尉と、出発。銃のさきに、白布をつけた伝騎が義々と飛び、いまや大作戦の幕のきつて落される瞬間、蜿蜒とつづく大兵力。

八月十五日 暗いうちから、夜明けのつめたい風をついて出発。閣下の後方に車に乗る。戦闘司令所の出発だ。孟県着。午前十時。途中、彼ら劇団員の戦闘部隊と共に行動してゐるのを追ひ越す。みんな手をあげて合図する。彼らの間隔は三十米もあいてゐるところがある。徹夜の行軍の疲れが、顔に出てゐる。小孩は車上の私を見て、暫くの間、追ひかける。乗せてやりたいけれども、何とも出来ぬ。道に、兵隊ごろごろと寝転んでゐる。孟県につくと早速ろ営にかかる。新民会に行き、劇団員、先鋒工作隊、捕虜の宿舎をきめる。午後彼らつかぬに、戦闘司令所は、状況によつて、上社鎮に出発。馬で先行してきた鍋田氏と、勝川中尉殿は自動車で出発。政治工作班を迎へ、宿舎、給与の世話をする。みんな元気そうだ。政治工作班は劇団部を残して、同夜中一時出発。昔陽から三日三晩の行軍（約四十里）に、同情する。

注 右の記述は第二次晋察冀辺区肅正作戦（一九四一年八月一日〜一〇月一日）が実施されたことを示している。

期日 場所

八・一七 東関

八・一八 大賢村 二〇支里

八・二〇 下鳥河村 一五支里南

八・二三 南河村 一〇支里西

八・二五 孫家庄村 一〇支里東北

八月十六日 休養。

八月十七日 東関で芝居をする。

八月十八日 大賢村へ行く。治安地区といつても、いつも敵がはいつてゐて、敵にも税金をとられてゐるといふ、華北の特殊地帯。今日も先県の県警備隊が、敵基幹遊撃隊と戦闘して追つばらつたといふところへ乗りこみ演じる。距城二十支里。日本人としては、自分と県顧問の普天馬氏の二人。廟で民衆大会。孟県知事、

高邦隆は相当豪塊な男にちがひない。廟の上から見ると、青々とした高粱、麦、草が繁茂し、その間に便衣の幾名の警備隊が、部落の周囲、要処に立哨してゐる。家は、両方に税金を納めてゐるので、疲弊しつくしてゐるらしい。青い梨をくれる。さつきまで、敵が工作してゐた部落民に、こんどはこちらがはたらきかけて行く。まったく、執拗な民衆獲得戦である。今日の支那事変の最も特色的な面だ。

八月十九日。

休養。新しい劇の練習。夜、勝川中尉殿より明日陽泉より団長来るとのこと。

八月二十日。

今日は雨模様。三時出発。雨の嫌ひな中国人だからと思つたが、下戸河村（距離十支里）に行きしばらくすると、鐘を鳴らせて、近郊から民衆があつまつて来た。このとき、便衣の警察隊が二人の男をつかまへて来る。一人は敵の農会長、で今日会合に出席する途中を捕へたとのこと、もう一人は、日本憲兵隊の密偵を詐称して、部落の良民を脅かし、金品を強要してゐた者。県長、その他、県公署の役人や区長、新民会の中国人の演説があつて、和平劇団の舞台となる。

帰ると、李浴檀、向山君たちにつれられて来ている。南のうれしさうな顔、走り込む彼女の顔がぼつと赤くなつてゐる。その夜の団員の楽しげな空気。私はらうそくを二本余計に与へた。

八月二十一日、

鄭と李と呼び、今日から二人で、劇団の責任を持つて貰ふことをいふ。李が団長、鄭が生活隊長。厳正な生活を強ひる。李、新作の旧型劇を書き下す。「花燭の夜」新婚の夜といふのだ。八路军に掠奪された良民の娘が、婚礼の夜、貞操を守つて、自殺する話らしい。早速、猛練習。孟県城の東関や南関から、音楽をやる者、三名ばかりあつめる。みんな農民だ。山西にはどこに行つても、支那芝居をやる者があり、音楽をやる者がゐる。どこの村にも、衣裳や楽器がある。彼らはふだんは百姓をしてゐて、廟の祭りとか、さういふときに、三日間位ぶつづけに芝居をする。さういふときは、近くの村から、或は五十支里もある村から見に来て、親類縁者をたよつて、そこに泊まりこんで、芝居を見物するのである。食物とし

では粟やたうもろこしの粉を持つてゐるだけだ。

八月二十二日

勝川中尉殿からの命令で、上社鎮の拡声器の放送要員として二名、姑娘を探してさしだすやうにとのこと。早速新民会の人たちと話し、新民小学校の女教員、張玉蓮と田普蘭をだすやうにして、呼んで来る。十九才と二十二才、どちらもどんなところへつれて行かれるかと思つて、恐れてゐる。よくいひきかせて、李通訳に附添つて貰つて、午後三時出発。団長に作らせた山の中に隠れてゐる敵と民衆とに対して帰来を勧告する文を五種、共に持たせてやる。

終日猛練習。

八月二十三日

天気很好。彼らは六時から起きてゐるらしい。朝起きるともう朝食「給」つてゐる。鄭作曲作詞の「怒吼晦！老百姓」（吼えろ、老百姓）といふのをつくつて来る。敵に「怒吼晦！薰河」といふのがあるのを聞き、「怒吼晦！老百姓」といふのをそれに対抗してつくれといったのは半月も以前である。やうやくそれが出来た。共產軍の暴虐を歌つたものだ。今日は南河村行き。午後二時半出発。距城十支里。南河村ではまた敵工作員二名と部落の不良分子とが警備隊にとらへられてゐた。據沱村の偽県公署から最近偽第二区公所に命令されて来たものが、部落の状態がわからないので、部落の不良分子が案内して、部落をまはつてゐるとき、中国警備隊につかまつたのださうだ。一人は区公所の「助」「理」員ださうだ。高県長は、敵の顔をはりつけた。戦闘的な県長だ。第二次治安強化運動の白熱を思はせる。火を吹くやうな民衆獲得戦だ。嚴重な警戒裡に、公演終る。

八月二十四日

上社鎮へやつて、女教員の姑娘たち帰つて来る。毎日二回、朝と晩（九時まで）山のトオチカへ、徒歩で三十分のところをあげり敵と民衆へ放送したといふ。「辛共、辛共」といふと、「没有辛共」といふ。髪や肩に、土塊りが一杯。顔が陽に焼けてゐる。上社鎮の帰来民約三百といふ。政治工作班の活躍めざましい。河村、写真を撮りに来てくれる。

二十五日

今日は、孫家庄村の公演だ。昨夜、孫家庄村の隣の村に、八路军が二十名ほどはいつて来て、村長、副村長、役員など六名、ひっぱつて行つたと情報はいつた。距城八里のところで、そんなことがあるとは、早くいつてくればいいのに、みんないふ。村長は毎日寝ところをかへ自分の家で寝てないのだが、村の内通者が案内するのだ。県知事と一緒に午後二時出発。開演中、警察隊、便衣で来る。十支里のところで、戦闘して来たといふ。敵は歩哨だけでも十名ほど、山の上に立つてゐたといふ。部落民の情報があつたので、歩いてゐると突然山の方から打たれたのだといふ。損害なし。警察隊と警備隊と交代で、民衆大会の警戒だ。今日は、河村と兵隊は二名だ。「新燭夜」をはじめて上演。赤絵具を口に含んで、八路军に扮した馬が、花嫁の南の顔に吹きかけたので、（あまり沢山吹きかけすぎ）衣裳から何からまつ赤になり、民衆の拍手物凄し。開演後、村民が炊きだししてゐてくれて、麵を用意してゐてくれるといふので、折角の厚意と思ひ、みんな自動車に荷物を頼み、五名の警戒員と（うち二名しか小銃なし）、食事をする。一里半のところに敵の相当な部隊が戻り、今日は、ここに民衆大会があり、県知事が来、和平劇団が宣伝に来てゐるとすぐに密偵報が敵にはいつてゐるだらうから、いまみんな警戒員も帰り、和平劇団だけが食事中でも報告がはいると、急襲して来るかも知れない。食事をするために残り、例へ一名でも傷いたり、つれて行かれたりしたとあつては、自分の責任がためと思ひ、いい加減に食事をしして帰る。高梁や、粟の茂みに、基幹隊でも二、三十名眼を光らせてゐるかも知れない。けれども、我々は八支里の道を、夕陽を浴び、「漁光曲」を歌ひ、抗日歌の「黄水謠」を改造した、「赤禍恨」を歌ひ、やうやく県城に帰つて来た。部落の子供たちは夕陽に映える南、王たちの色あざやかな服に眼をみはつてゐた。途中、河村一兵が、いろんな場面を写真にとる。夜、二時までかかり、勝川中尉殿より命じられた上社鎮民衆に与へる、「和平劇団観覧券」を、鄭、馬、郭の三名と、贈写板で一板つくる。明日、河村に上社鎮も持つて行つて貰ふつもり。

八月二十六日

朝の自動車に乗りおくれ、河村明日、上社鎮へ行くといふ。

八月二十七日

今日は、暫く上社鎮方面に出るので、県城東関でお名残に、打つ。演し物は、「新釘缸」「父与女」「花燭夜」
観衆約二千名。

八月二十八日

自動車で上社鎮へ行く。午後九時出発。十一時着。午後、帰来民をあつめて、演劇。河の向ふの廟にて。約五名あつまる。八路军の捕虜三十名観覧。中原会戦の捕虜すこし先輩顔にて、新しい捕虜を指図す。本日、武器（銃、手榴弾）を持つて、帰順せる二名の八路军民衆の前にて賞与を高野警護より与へらる。

八月二十九日

つづいて、同じ場処にて演劇。今日は、五百名ほどあつまる。夜、勝川中尉、大串中尉殿たちと話す。

八月三十日 今日は更に前線の下社に行く。ここは割合に帰来民多く、会衆八百名。「吉」田部隊長の訓示あり。劇五つと跳舞、歌詠を全部見せる。午後六時終了。すぐと自動車にて帰る。沿道水清く、樹多く（とくに胡桃（アメリカ（□）るさう□）多く）青い胡桃の殻を割り、白い実を食べながら帰る。すつぽんもある。なつめの青い実をも、劇団員ら争つて、林の中に入り、樹をゆすつて実を落とし、食ふ。土民はすつぽん持つて来る。新民会三宅さんの世話になる。この人の部屋に孟県では、寝起きしてゐたのだが、いひそびれて黙つてゐた。

八月三十一日

今日は八月の終りだ。光陰真に疾矢の如し。第二回村長会議を、帰来民収容所で、勝川中尉殿たち行ふ。戦闘司令所、嵐の前のしつけさといふ感じ。暴風眼か？明日は中社行きとのこと。

九月一日 歩いて中社に行く。自分は馬で行く。草ぼうぼうたる釈迦寺で、演劇。良民たち、草を刈る。ここは、十数日前まで、八路军の十六団旅の宿営してゐた

ところらしく、壁に、標的が書いてあり、現員表などがかけてある。帰りは、土砂降り。みんな濡れ鼠となつて帰る。

九月二日

河で洗濯。

九月三日 馬^{ママ}フン村へ部落検索に行く。

九月四日 大賢村西溝へ、行く。今日も馬。長い河原を十八支里も行く。雉子多し。李荘にて検索。敵の宣伝物書類、本銃など押収して帰る。明日、孟県へ戦闘司令所移動の命令下る。梱包を遅くまでする。

九月五日 朝七時、政治工作班、捕虜、を見送り、宿舎へ来て休む。自分らは高野軍曹たちと、午後一時の自動車で行くことになる。劇団姑娘、老頭児、病人、捕虜の全民通信社記者（上海復旦大学二年修業）など載せる。羊を殺して昼飯をとる。八路军の女兵など、一生懸命に料理す。戦闘司令所の主力が去つたあとの肅條たる気分。住民、どんなはいつてくる。物凄い彼等の圧力のやうなもの。午後一時、出発。午後四時、孟県着、行軍部隊も一時間遅れて着く。

九月六日

城武村へ行く。援護は先鋒工作隊、勝川中尉は馬。自分たちは徒歩。支那里で八支里。天気清朗、残暑の草いきれ。女たちは牛車二台に、劇団の荷物と一緒に乗る。工作隊の中原会戦の捕虜たちは、部落に散つて、和平救国の文字を八路军の書いた上へ書く。帰途、高粱畑の細い道を、牛車は揺れながら行く。女たちは、「赤禍恨」や、「漁光曲」を歌ひ、男たちは黙々と歩く。老頭児は、どうもマラリヤらしく、今日はブルブルふるえてゐる。けれども、太鼓を叩くときは、流石にしゃんとしてゐる。彼の太鼓は、晋中で有名とのこと、七つのときから、習ひはじめたといふ。まつ赤な夕陽が、山西特有の峨々たる山に沈み、夕映えが、高粱や「包」米の未枯れた葉末をつつむ。全員、便衣の奇妙な部隊は行く。

九月七日

今日は県警備隊へ、劇団の引越し。

陝中国県警備隊一名戦死、葬式アリ 挺身御冠成仁 気節足勵民 为国摘軀不死
精神常昭史冊

義氣猶生 死得其所 英貌宛在 英名永震中国 精神猶在人間

九月十三日

東関東坡底で、夜演じる。私は、彼ら若者たちが、一度舞台に立つと、まったく劇中の人となるのをときどき新鮮なおどろきで見ることがある。二元などは、今日老人になり、若い女になり、最後に壮士の頭になって、青龍刀で大立廻りを見せた。芸の力といふか、私は自分がまったく「芸」といふものに関係のない人間でないだけに、彼らのさういふ肉体に圧迫を感じる。立廻りのとき、中国人の惨虐を好むのを知った。山西梆子だから、山西の特徴かも知れない。（燕趙悲歌の士）日本なら掛声のあるところ、支那では口笛を吹くのも初めて知った。

この手品師はふだんは熔鋸廠の工人をしてゐるらしい、どうして大変な玄人だ。老百姓がみな「好！」といつてゐる。それが驚いたことに、箱の中から兎や鳩を取りだした。いままで昨日来てから、私は彼がこんな生き物をその荷物の中に持つてゐるなどとは思つてゐなかつた。そばにゐる私にも悟らせない周到さ。コクトオだかの文章の中に、何にもないところから自由自在に、鳩や何かをとりだす支那の手品師といふのがあつたやうに思ふが、まったく私ははじめて、さういふ不思議な芸のたしなみを見た。

私は恐いことを考へてゐるのだらうか。彼らを武装させて、もつと県城から部落へ出、接敵地区へ食ひ込むこと。もしものとき、一人でも失ふことは、大変な損失ではあるが、結局、大きな効果を考へれば、さうすることがいいことなのだ。

九月十四日 香河村

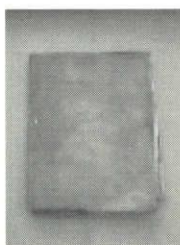
九月十五日 牽牛鎮

九月十六日 長池鎮

注 山西梆子

拍子劇（陝西省から流行した旧劇の一種）はある伝統劇に対する歌の節回しを

するシステムの総称である。それは山西省、陝西省の省境を接しているところの山、陝拍子劇から源を発している。節回しの感情や音声が高く激越であるのはその特徴である。拍子木を敲きながら節回しをする。それから拍子劇が東、南へ進展して、地域によって違ふ内容の拍子劇になった。例えば、山西拍子劇、河北拍子劇、河南拍子劇、山東拍子劇などがある。



手帳：和平劇団日記